都城市文化財調査報告書　第115集

Shimoobirano daiyon Site

下尾平野第４遺跡

－携帯電話無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

２０１５年３月

宮崎県都城市教育委員会

都城市文化財調査報告書　第 115 集

Shimoobirano daiyon Site

下尾平野第４遺跡

－携帯電話無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

序　　文

本書は、平成 25 年度に携帯電話無線基地局建設に伴って発掘調査を実施した下尾平野第 4 遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書であります。本書に所収いたしました下尾平野第 4 遺跡は都城市の南部、安久町に所在しております。今回の発掘調査では、縄文時代の遺構・遺物が見つかっており、当該期の人々の生活の痕跡が見て取れる遺跡であります。

これら先人の残した文化財を守り引き継いでいくことは、私たち都城市民の責務でもあります。

本書を通して、こうした地域の歴史、文化財に対する理解と認識がますます深まる事を願いますとともに、今後の学術研究の資料として多くの方々に活用して頂ければ幸いです。

最後となりましたが、発掘調査から本書刊行に至るまで事業者であるソフトバンクモバイル株式会社九州技術部様をはじめ、作業に従事していただいた市民の皆様、関係諸機関・個人に多大なる御理解・御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

2015 年 3 月

都城市教育委員会
教育長　黒木　哲徳

例　　言

1. 本書は、「携帯電話無線基地局建設」に伴い、平成 25 年度に実施した下尾平野第 4 遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は都城市教育委員会が主体となって、同市文化財課主査加覧淳一、同主事原栄子が担当した。
3. 本書で使用したレベル数値は海抜絶対高で、基準方位は真北である。
4. 本書で使用した遺跡位置図は、国土地理院発行の 5 万の 1『末吉』を基に作成した。
5. 現場における遺構実測は、発掘調査作業員の協力を得て加覧・原が行った。
6. 本書に掲載した遺構のトレースは株式会社 CUBIC の「トレースくん」並びに Adobe 社「Illustrator CS3」を用いて原が行った。また、遺物の実測・トレースについても原が行った。
7. 遺構・遺物の写真撮影は加覧・原が行った。
8. 本書の遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・写真の番号は一致する。
9. 土層と遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）2001 年度前期版を参考にした。
10. 土器付着顔料分析については、独立行政法人国立高等専門学校機構都城工業高等専門学校の協力を得た。
11. 本書に掲載した遺構実測図の縮尺は、1/20 とした。遺物実測図は土器 1/3、石器 1/1 とし、各図版に示している。
12. 本書の執筆・編集は原が行った。
13. 発掘調査で出土した遺物と全ての記録（図面・写真など）は都城市教育委員会で保管している。
14. 出土土器の分類・報告に際して、下記文献を参考とした。

    相美伊久雄　2000「深浦式系土器の再検討」『人類史研究』№.12　人類史研究会

目　　次

本文目次

第１章　序説 …… 1
　第１節　調査の経緯と経過 …… 1
　第２節　調査組織 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 2
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　調査の成果 …… 5
　第１節　調査の方法と概要 …… 5
　第２節　下尾平野第４遺跡の基本層序 …… 6
　第３節　検出遺構 …… 8
　　⑴土坑 …… 8
　　⑵ピット …… 9
　第４節　包含層出土遺物 …… 9
第４章　調査のまとめ …… 13
写真図版 …… 14
報告書抄録 …… 17

挿図目次

第１図　下尾平野第４遺跡と周辺の遺跡位置図…… 2
第２図　調査地点位置図 …… 5
第３図　トレンチ配置図 …… 5
第４図　調査区土層断面図 …… 7
第５図　縄文時代早期遺構配置図 …… 8
第６図　SC １実測図 …… 8
第７図　P １実測図 …… 9
第８図　Ⅲ層遺物出土状況平面図 …… 9
第９図　出土遺物実測図 …… 11

挿表目次

第１表　下尾平野第４遺跡周辺遺跡一覧表 …… 4
第２表　下尾平野第４遺跡出土土器観察表 …… 12

図版目次

写真図版１ …… 10
写真図版２ …… 14
写真図版３ …… 15
写真図版４ …… 16

第１章　序説

第１節　調査の経緯と経過

都城市安久町3517番５において、ソフトバンクモバイル株式会社による携帯電話無線基地局建設を目的とする計画があり、それに伴い、平成24年４月18日に有限会社ジーアイエス南九州乗峯和英氏から文化財所在の有無について照会がなされた。これを受け、対象地は「周知の埋蔵文化財包蔵地」であることから、平成24年７月３日に都城市教育委員会が事業予定地の確認調査を実施した。確認調査では携帯鉄塔建設予定地に２×２（m）のトレンチを設定した。調査を行った結果、事業対象地に縄文時代早期の遺跡が遺存していることが判明した。

この確認調査の結果を受けて、有限会社ジーアイエス南九州と同市教育委員会で協議を行い、本工事により影響があると考えられる36㎡については、事前に記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

平成25年５月13日には本工事の事業主体であるソフトバンクモバイル株式会社九州技術部より文化財保護法93条第１項に基づく発掘届出が提出された。この後、平成25年７月１日付けでソフトバンクモバイル株式会社と都城市との間で「下尾平野第４遺跡に関する協定書」を締結した。このことにより、対象地点の本発掘調査を平成25年８月に実施し、報告書作成は翌平成26年度に実施することが取り決められ、発掘調査・報告書作成に係る費用はソフトバンクモバイル株式会社九州技術部が負担することも併せて取り決められた。同日付けで下尾平野第４遺跡埋蔵文化財発掘調査業務委託契約も締結され、現地での発掘調査へ移行することとなった。

現場での発掘調査は平成25年８月19日から平成25年９月13日まで行い、それに並行して出土遺物の水洗・注記・接合作業を都城市文化財課で行った。出土遺物の実測作業は現場での調査終了後から行い、報告書の執筆・編集作業は主に平成26年度に実施した。

第２節　調査組織

下尾平野第４遺跡の発掘調査組織は以下のとおりである。

平成25年度の組織（発掘調査実施年度）

・調査主体者　宮崎県都城市教育委員会
・調査責任者　教　育　長　　酒匂　醸以（平成26年２月24日まで）
　　黒木　哲徳（平成26年２月25日から）
・調査事務局　教育部長　　池田　文明
　　文化財課長　　新宮　高弘
　　文化財副課長　　松下　述之
　　文化財課主幹　　桒畑　光博
・調査担当者　文化財課主査　　加覧　淳一
　　文化財課主事　　原　　栄子
・庶務　　文化財課嘱託　　松村　美穂
・発掘調査従事者　　今村まさ子・今村ミツ子・奥　利治・高橋露子
　　竹中美代子・福重光男・馬籠恵子・森山タツ子

平成26年度の組織（報告書刊行年度）

・調査主体者　宮崎県都城市教育委員会
・調査責任者　教　育　長　　黒木　哲徳
・調査事務局　教育部長　　児玉　貞雄
　　文化財課長　　新宮　高弘

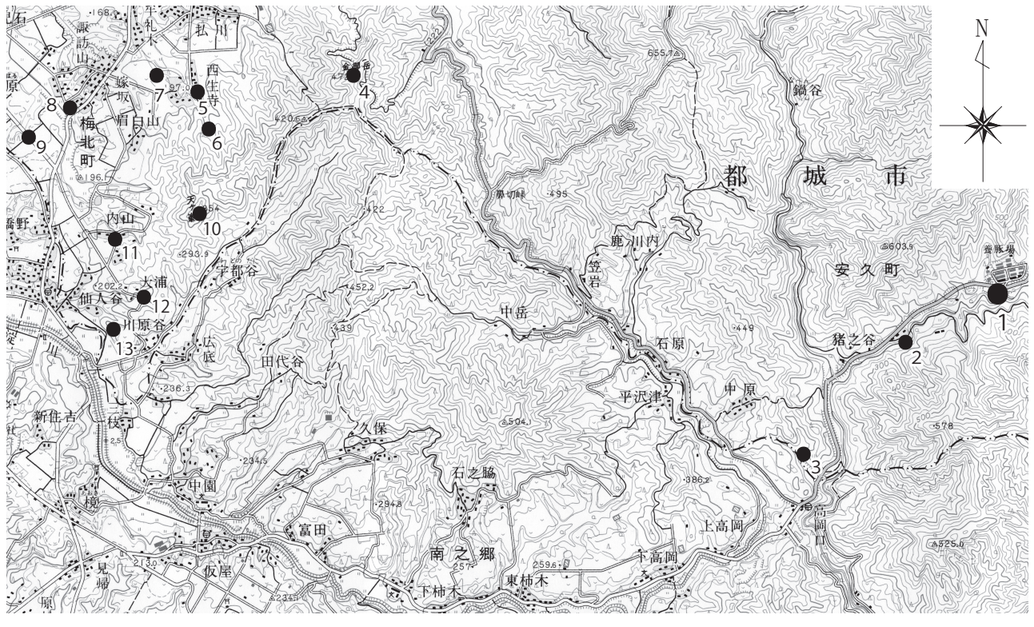
	文化財副課長	松下　述之
	文化財課主幹	桒畑　光博
・調査担当者	文化財課主事	原　　栄子
・庶務	文化財課嘱託	松村　美穂（平成26年４月まで）・畑中　夏奈（平成26年６月から）
・整理作業従事者	奥　登根子	

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境（第１図・第２図）

下尾平野第４遺跡は宮崎県都城市安久町に所在する。都城市は九州東南部、宮崎県南西部に位置し、都城盆地のほぼ中央を占める。平成18年１月１日には高崎町、高城町、山田町、山之口町の北諸県郡４町との合併により、新都城市が誕生した。この合併に伴って人口は17万人を超え、市域は約650㎞に及び、人口規模は南九州第３の都市となる。

都城市が位置する都城盆地は、南北約25㎞、東西約15㎞の楕円状を呈している。東半部に東岳・柳岳を主峰とする山地、北西に高千穂峰をはじめとする霧島火山群があり、東と西を山地に囲まれた広大な地溝状の凹地を呈する。盆地の中央を南から北に向かって、大淀川が流れているが、盆地の地形は大淀川を挟んで東側には扇状



1. 下尾平野第4遺跡　2. 尾平野洞窟　3. 安久中原遺跡　4. 金御岳遺跡　5. 西生寺（近世）　6. 西生寺（平安）　7. 梅北佐土原遺跡
8. 嫁坂遺跡　9. 緩毛原第2遺跡　10. 天ヶ峯陣跡　11. 大浦遺跡　12. 千手院跡　13. 川原谷出水遺跡

第１図　下尾平野第４遺跡と周辺の遺跡位置図（S=1/50,000）

地地形、西側にはシラス台地が広がっている。

遺跡の所在する安久町は都城盆地の南部に位置する。下尾平野第４遺跡は安久町の中でも都城盆地南方の山間部に位置し、安楽川右岸のシラス台地上位面の標高約309ｍのところに立地する。北南は両方急峻な山地に挟まれており、東は日南市、南は鹿児島県曽於市との市境に位置している。

第２節　歴史的環境（第１図）

下尾平野第４遺跡が所在する中郷地区は、市の南部、大淀川上流右岸から同川支流萩原川左岸にかけて位置し、地区内を安久川・梅北川が流れる。地区の南東部一帯は山岳地域であり、東に牛之峠、南に金御岳がそびえる。下尾平野第４遺跡が所在する山間部周辺では遺跡の調査がほとんど行われていないため、ここではこれまでの発掘調査および遺跡分布調査の成果を参考に、時代ごとに本遺跡を取り巻く中郷地区の歴史的環境について触れておく。

昭和62年度に実施された遺跡詳細分布調査によって、中郷地区では89の遺跡が確認されている。

中郷地区では大岩田町に所在する大岩田上村遺跡で、旧石器時代の細石刃石器群が出土しているが、現在それ以外に当地区での旧石器時代の遺跡は確認されていない。

縄文時代の遺跡としては、川原谷出水遺跡で縄文時代草創期～早期における遺構・遺物が検出されており、特に草創期について遺構は検出されていないが、隆帯文が貼付された土器が出土している。草創期の遺物は都城市内でも出土例が少なく、重要な出土事例である。安久中原遺跡は本遺跡から約３㎞のところに所在し、安楽川によって開析された山地中腹に形成されている。ここでは鬼界アカホヤ火山灰を埋土とした土壙が１基検出されており、出土遺物については、アカホヤ火山灰下位の堆積層から下剥峯式土器、条痕文土器、前平式土器などが出土している。梅北佐土原遺跡では、縄文時代前期ないしは中期の陥し穴状遺構と集石遺構が検出されており、早期～中期の土器が出土している。また、平成10年度にも宮崎県埋蔵文化財センターによる発掘調査が行われ、縄文時代早期の集石、後晩期の遺物が検出されている。緩毛原第２遺跡では縄文時代前～後期の遺物が採集されている。1936年（昭和11年）に発見された尾平野洞窟は本遺跡から約１㎞のところに所在し、志布志湾にそそぐ安楽川上流によって開析された山地の北側斜面に穿たれたシラスの水蝕洞穴であり、昭和32年に県指定の史跡となっている。周辺の分布調査からは縄文後晩期の土器のほか、骨角器、動物骨、貝類などが出土している。動物骨などの自然遺物は、狩猟や漁労、採集など当時の人々の生活を知る上でたいへん貴重な資料である。成山遺跡では昭和40年代に宮崎大学による２度の調査が行われ、その後1996年に都城市教育委員会によって調査が行われた。成山遺跡からは縄文時代晩期の竪穴住居跡が検出されており、遺物については晩期のものが主であるが、後期の土器や土製品も出土している。王子原・上安久遺跡では縄文時代早期の集石遺構１基と土坑８基、後晩期の土坑３基が検出されている。遺物については、都城市内では未だ出土事例に乏しい縄文時代前期の轟Ｂ式土器・曽畑式土器が出土している。王子原遺跡は宮崎県埋蔵文化財センターが発掘調査を行った地点についても轟Ｂ式土器の出土が確認されている。

弥生時代については縄文時代ほどの遺跡数はないが、梅北川上流の段丘上に所在する大浦遺跡から弥生時代の竪穴住居跡が１軒検出されている。短辺中央付近の竪穴外に１個ずつピットが検出されており、棟持柱を有していたと考えられる。古墳時代については、梅北川東岸の成層シラス台地南端に所在する尾崎第１遺跡（貴船寺跡）から古墳時代の竪穴住居跡が２軒検出されている。

中世に入ると遺跡数が増加する。特に梅北町や安久町といった市内南部では、寺院など宗教施設や城郭が数多くみられることが特徴といえる。水田跡や畠跡を検出した天ヶ渕遺跡、嫁坂遺跡などの遺跡のほか、寺院跡の正応寺や西生寺跡（古代・近世）、千手院跡、勝軍院跡、城郭跡の六ヶ城、池平城、梅北城、砦跡の天ヶ峯陣跡、金御岳遺跡がある。また、平安仏教文化の影響を濃く受けたこの地方では、同時代のものと見られる経筒が発見されている。安久町松ヶ迫に所在する長谷観音寺跡（松迫経塚）では４基出土しており、その一つの経筒の蓋に使用されていた湖州鏡に針書きで埋納の理由と承安５年（1175年）銘がある。

近世では、尾崎第１遺跡（貴船寺跡）から中世～近世の墓壙が合わせて144基検出された。埋葬形式や墓壙

の形態は様々であり、出土遺物も煙管や土鈴、軽石製独楽など多くの副葬品が見つかっており、近世の墓制を知る上では貴重な資料である。王子原・上安久遺跡でも土壙墓が５基検出されており、検出された付近の調査区外には近世～近代にかけての墓石が散在しており、時期としては少なくとも中世後期以降、近現代に至るまで墓域として使用され続けたことが分かる。

【引用・参考文献】

都城市教育委員会　1987『都城市遺跡詳細分布調査報告書(市内南部)』都城市文化財調査報告書　第６集

都城市教育委員会　1995『天ヶ渕遺跡』都城市文化財調査報告書　第33集

都城市教育委員会　1997『大浦遺跡』都城市文化財調査報告書　第37集

都城市教育委員会　2007『梅北佐土原遺跡』都城市文化財調査報告書　第76集

都城市教育委員会　2011『王子原遺跡　上安久遺跡』都城市文化財調査報告書　第103集

都城市教育委員会　2014『川原谷出水遺跡』都城市文化財調査報告書　第112集

都城市史編さん委員会（編）　2005『都城市史　通史編　中世・近世』都城市

都城市史編さん委員会（編）　2006『都城市史　資料編考古』都城市

宮崎県農政水産部農村建設課（編）1993『南那珂地域　土地分類基本調査　末吉』宮崎県

宮崎県埋蔵文化財センター　2001『王子原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第45集

宮崎県埋蔵文化財センター　2011『富吉前田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第209集

第１表　下尾平野第４遺跡周辺遺跡一覧表

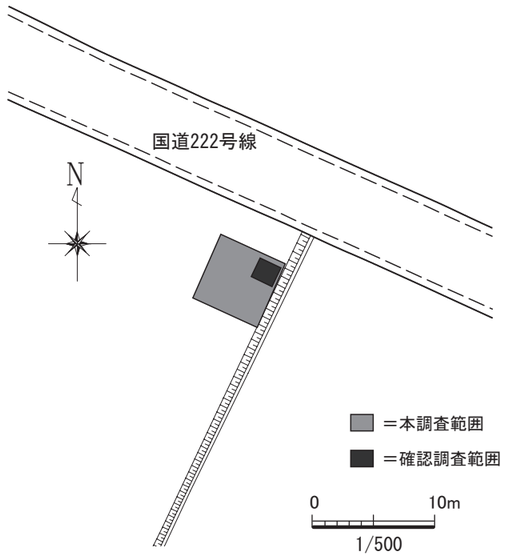
番号	遺跡名	所在地	種　別	時　代	概　要
1	下尾平野第４遺跡	安久町字下尾平野	散布地	縄　文	土坑・ピット・縄文土器・石鏃
2	尾平野洞窟	安久町字下尾平野	住居跡	縄　文	縄文土器・骨角器・動物骨・貝類
3	安久中原遺跡	安久町字中原	散布地	縄　文	土壙・縄文土器・石器
4	金御岳遺跡	梅北町・安久町	散布地	中世･近世	砦　跡
5	西生寺（近世）	梅北町西生寺	寺　院	近　世	
6	西生寺（平安）	梅北町西生寺	寺　院	平　安	
7	梅北佐土原遺跡	梅北町字佐土原柚木園	散布地	縄文･古墳･中世	縄文土器・石器・陶磁器・土師器
8	嫁坂遺跡	梅北町字嫁坂ほか	散布地	縄文～近世	水田跡･土坑･ピット縄文土器･磨製石斧･弥生土器･土師器･陶磁器
9	緩毛原第２遺跡	梅北町字中崎ほか	散布地	縄文～近世	縄文土器・東播系須恵器
10	天ヶ峯陣跡	梅北町字金御岳	砦　跡	中　世	砦　跡
11	大浦遺跡	梅北町字中崎ほか	散布地	縄文～近世	竪穴住居跡(弥生)･縄文土器･弥生土器･石器
12	千手院跡	梅北町千手院	寺　院	中　世	
13	川原谷出水遺跡	梅北町	集落跡	縄　文	集石遺構・土坑・土器集積・縄文土器

第２図　調査地点位置図　(S=1/10,000)

第３章　調査の成果

第１節　調査の方法と概要

調査対象地は安久町、安楽川右岸のシラス台地上位面に位置しており、調査前の状況は畑地である。工事計画によれば、調査対象地に携帯電話無線基地局を建てるというものであった。事前の確認調査により、遺跡が遺存している範囲で工事により遺跡に影響がある約36㎡について発掘調査を実施した（第３図）。なお、調査は縄文時代前期～中期と早期の２面の文化層を対象に実施しており、実質の調査面積は約72㎡となる。



第３図　トレンチ配置図　(S=1/500)

発掘調査はまず重機によって表土（Ⅰ層）以下、御池軽石層（Ⅱ層）までを剥ぎ取り、その後人力によって遺物包含層であるⅢ層の掘り下げを行った。さらに鬼界アカホヤ火山灰層（Ⅳ層）を重機によって剥ぎ取り、牛のすね火山灰層（Ⅴ層）以下は再び人力による掘り下げを行った。出土遺物については出土位置をトータルステーションによって記録後取り上げを行い、遺構精査および検出は縄文時代前期～中期についてはⅣａ層上面、縄文時代早期についてはⅦ層上面にて行った。検出後は適宜実測および写真撮影等の記録保存の措置を講じた。調査終了後は調査区の埋め戻しを行い、すべての調査工程を終了した。

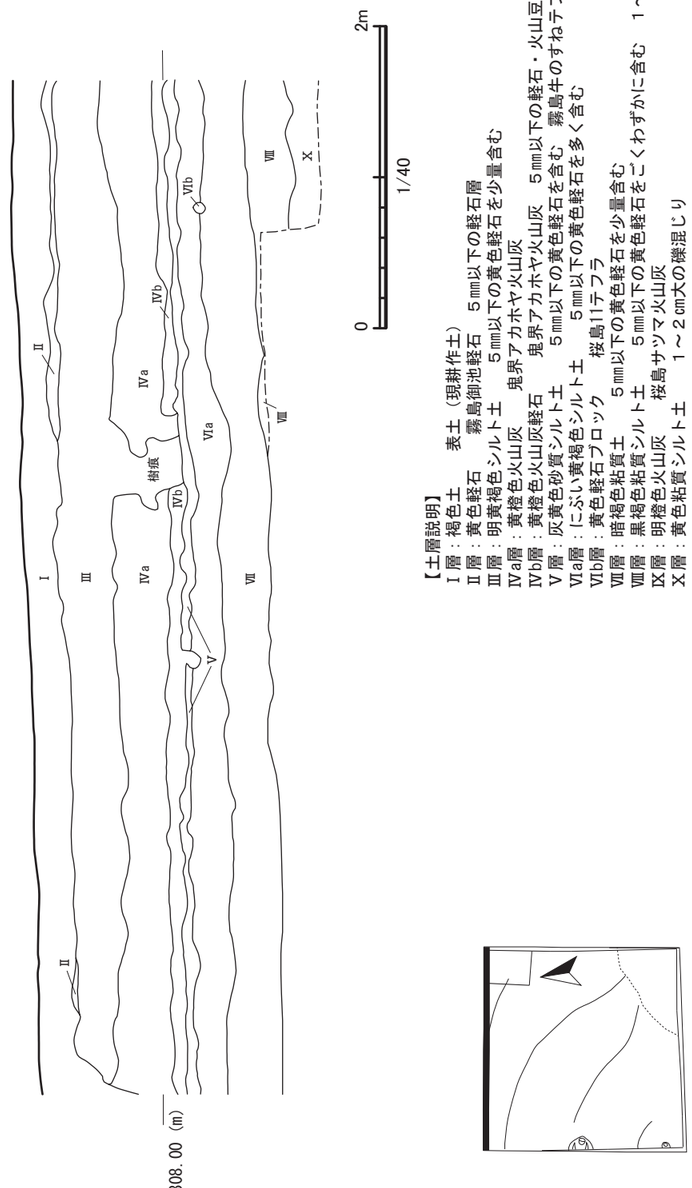
調査の結果、遺構は縄文時代早期層で土坑１基、ピット１基が検出された。出土遺物については縄文早期･中期土器等が出土した。

第２節　下尾平野第４遺跡の基本層序（第４図）

本遺跡の表土以下は、大きな撹乱が３箇所確認され、Ⅱ～Ⅴ層までその影響を受けていた。また調査区南側では巨大な横転が確認され、黄色粘質シルト土（Ⅹ層）以下まで影響を受けていた。横転については、Ⅱ層の霧島御池軽石層も持ち上げていたことから、御池軽石降下以降の時期に起こったものと考えられる。土層断面については、横転や撹乱の影響をほとんど受けていない北壁の実測を行った。今回の調査で確認された基本土層については以下の通りである。事前に行われた確認調査成果及び調査区北側の土層堆積状況を基準に設定した（第４図）。

Ⅰ　層 ： 褐色（7.5 Ｙ Ｒ 4/4）土（表土　現耕作土）
Ⅱ　層 ： 黄色軽石（５㎜以下の黄色軽石層 「霧島御池軽石層（Ｋｒ－Ｍ）」 約 4,200 年前）
Ⅲ　層 ： 明黄褐色（10 Ｙ Ｒ 7/6）シルト土（５㎜以下の黄色軽石を少量含む）
Ⅳａ層 ： 黄橙色火山灰（「鬼界アカホヤ火山灰層（Ｋ－Ａｈ）」 約 6,300 年前）
Ⅳｂ層 ： 黄橙色火山灰軽石（５㎜以下の軽石・火山豆石）
Ⅴ　層 ： 灰黄色（2.5 Ｙ 6/2）砂質シルト土（５㎜以下の黄色軽石を含む「霧島牛のすねテフラ」）
Ⅵａ層 ： にぶい黄褐色（10 Ｙ Ｒ 5/4）シルト土（５㎜以下の黄色軽石を多く含む）
Ⅵｂ層 ： 黄色（2.5 Ｙ 8/8）軽石ブロック（５㎜以下の黄色軽石がブロック状になっているもの「桜島 11 テフラ」Ⅵｂ層については一部しか確認されていない。）
Ⅶ　層 ： 暗褐色（10 Ｙ Ｒ 3/4）粘質土（５㎜以下の黄色軽石を少量含む）
Ⅷ　層 ： 黒褐色（10 Ｙ Ｒ 2/3）粘質シルト土（５㎜以下の黄色軽石をごくわずかに含む１～２㎝大の礫混じり）
Ⅸ　層 ： 明橙色火山灰（「桜島サツマ火山灰（Ｐ 13）」約 13,000 年前）
Ⅹ　層 ： 黄色（2.5 Ｙ 8/6）粘質シルト土（１～２㎝大の礫混じり）

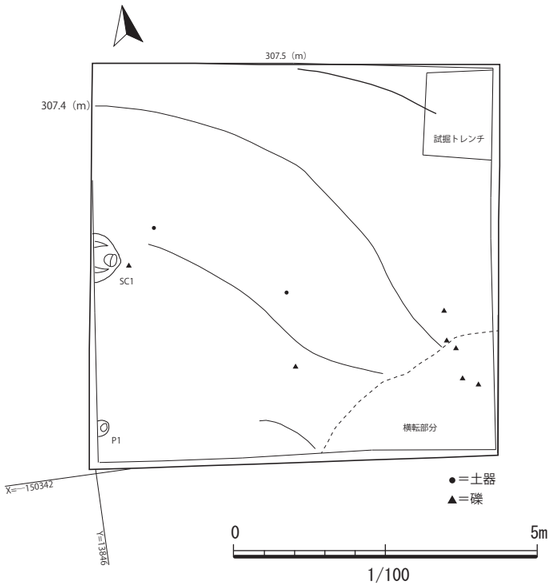
Ⅰ層は褐色土で、現耕作土である。Ⅱ層は約 4,200 年前の霧島御池軽石層である。本遺跡調査区内ではⅠ層耕作土による掘削の影響もあり、10㎝程度を測るのみであった。Ⅲ層は５㎜以下の黄色軽石を含む明黄褐色シルト土で、縄文時代前期から中期に相当する遺物包含層である。Ⅳ層は鬼界カルデラを起源とする約 6,300 年前の鬼界アカホヤ火山灰層で、下部には火山豆石が確認できる。層厚は火山豆石層も含めると 40㎝程度を測る。Ⅴ層は黄色軽石を含む灰黄色砂質土で硬くしまる。霧島牛のすねテフラ相当層である。Ⅵａ層はシルト質のにぶい黄褐色土で、５㎜以下の黄色軽石を多く含んでいる。Ⅵｂ層はブロック状となった黄色軽石が部分的に確認される。これは桜島起源とする桜島 11 テフラに相当する。Ⅶ層は粘性の強い暗褐色土で、黄色軽石を少量含んでいる。Ⅴ～Ⅶ層は縄文時代早期に相当する遺物包含層である。縄文時代早期はⅦ層が遺構検出面で、Ⅵａ層が遺構内埋土として堆積している。Ⅷ層以下は深堀トレンチの掘り下げによって確認できた層である。Ⅷ層は粘質の黒褐色シルト土で、遺物の出土などは一切確認されず、１～２㎝大の礫の混じった層である。Ⅸ層は桜島起源とする約 13,000 年前の桜島サツマ火山灰（Ｐ 13）層である。Ⅸ層は、調査区南側の一部のみで堆積が確認された。堆積箇所はごく一部分で、白色化したサツマ火山灰がブロック状に堆積しており、横転部分でも下から持ち上げられた火山灰がブロック状に確認された。調査区の地形が北東側から南西側にかけて緩やかに傾斜しているため、調査区南側以南に堆積しているものと考えられる。Ⅹ層は粘性の高い黄色シルト土で遺構及び遺物は確認されていない。Ⅷ層同様１～２㎝大の礫が混じった層である。



第４図　調査区土層断面図（S=1/40）

第３節　検出遺構

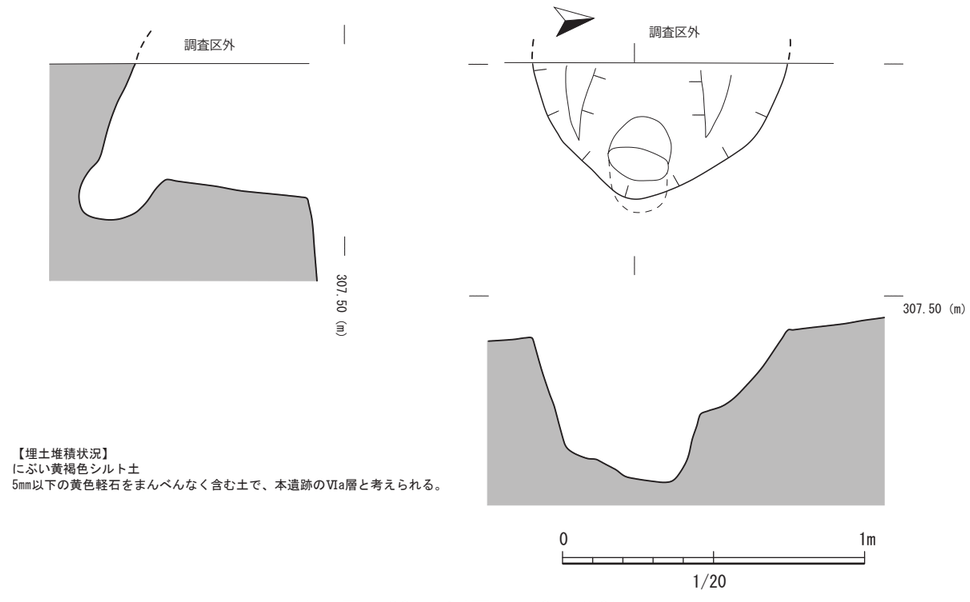
本調査区では、縄文時代の遺構として土坑１基、ピット１基が検出された（第５図）。いずれもⅦ層、縄文時代早期層からの検出である。調査区西側から検出されており、西側に遺構が広がる可能性が考えられる。アカホヤ火山灰層上のⅢ層、縄文時代前期～中期の遺構については撹乱や横転などの影響もあり、検出されなかった。



第５図　縄文時代早期遺構配置図　(S=1/100)

（１）土坑　ＳＣ１（第６図）

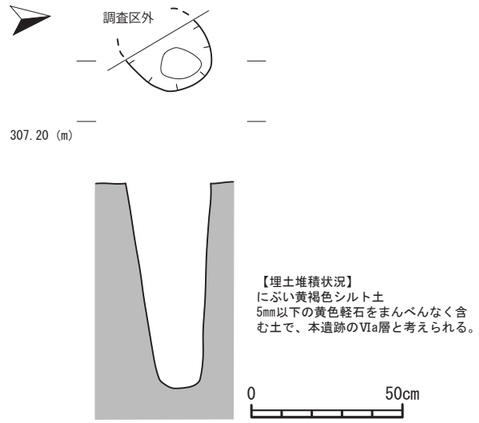
ＳＣ１は長径 82㎝×短径 45㎝（＋α）を測る土坑であるが、遺構西側は調査区外へ延びているため遺構の全容を把握することができなかった。検出面はⅦ層で検出面からの深さは最も深い部分で 78㎝を測る。しかし調査区際で検出されたため調査区西壁で遺構埋土を観察すると、Ⅶ層上面から掘り込まれていることが確認でき、本来は検出面からおよそ 15㎝上が遺構の掘り込み面であり、90㎝を超える深さの土坑であることがわかった。検出面から約 35㎝の深さで北側が一部段掘りになっており、床面東側はさらに奥に掘り込まれた形となっている。遺構内埋土は一様であり、５㎜以下の黄色軽石を含むにぶい黄褐色シルト土で、本遺跡のⅥａ層に当たると考えられる。遺構最深部では黄色軽石がわずかに多くなり、それに伴って検出面より若干硬質となる。遺構内から遺物の出土は確認されなかった。



第６図　SC1実測図　(S=1/20)

（２）ピット　Ｐ１（第７図）

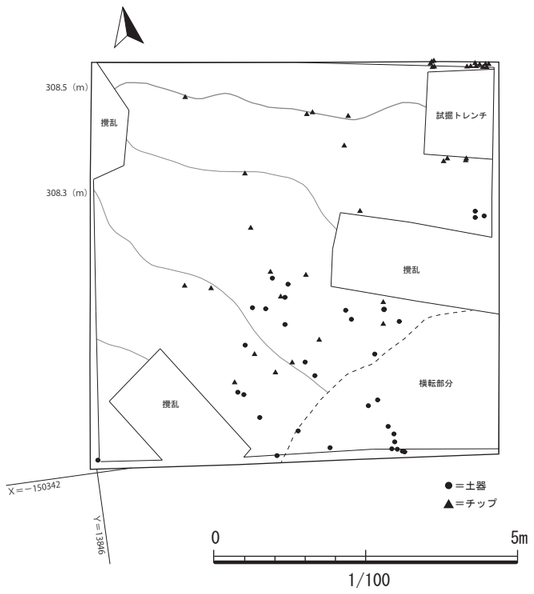
Ｐ１は、直径約 25㎝、深さ約 66㎝を測る円形の柱穴である。調査区南西側の壁際で検出され、遺構全体を検出することはできなかった。ピット内の埋土はＳＣ１同様、本遺跡のⅥａ層に当たる土である。ピット内からの出土遺物は確認されなかった。また、周辺にはＳＣ１以外の遺構は確認されておらず、また調査区際ということもあり、遺構に伴うピットであるかについては不明である。



第７図　P1実測図　(S=1/20)

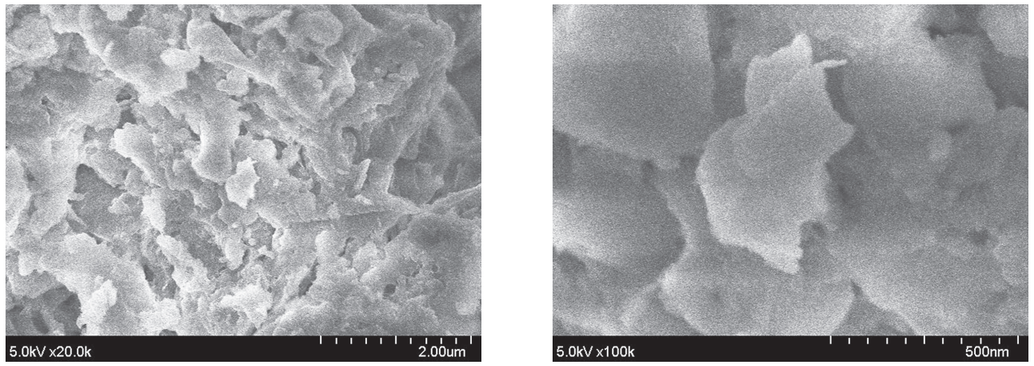
第４節　包含層出土遺物（第８図･第９図）

本調査区では、縄文時代早期～中期の土器が出土した。縄文時代早期（Ⅴ～Ⅶ層）における出土遺物でトータルステーションによって取り上げを行った土器は、２点のみであった。石器の出土は確認されず、礫がまばらに出土するのみであった。出土状況平面図を見ても、調査区南側に非常に疎らに出土している（第５図）。その中でも南側横転部分からは早期土器がいくつか出土しているが、横転で混在した土層からの出土でいずれも小片であったため、土器型式などの判断が困難である。縄文時代前期～中期（Ⅲ層）における出土遺物は、土器は早期同様調査区南側に疎らに出土しており、出土遺物の大半はチップであった（第８図）。土器は縄文時代中期に比定される土器が出土している。石器についてはチップが比較的まとまって出土しており、分布図を見てみると調査区北側の確認調査のトレンチ付近での出土が目立っている。確認調査では土器は出土していないが、トレンチ東側部分で打製石鏃の出土が１点確認されている。



第８図　Ⅲ層遺物出土状況平面図　(S=1/100)

１は縄文時代早期の土器である。Ⅶ層包含層から出土した唯一の土器で、大きく外反する器形を持つ口縁部片である。外面には押型文と考えられる文様が施されているが、土器片は非常にもろく、文様や器面調整については磨耗が激しくわずかに確認できるのみである。また、土器表面には内面・外面ともに赤色顔料が一部塗布されており、当時は内外面ともに器面全体に塗布されていた可能性も考えられる。走査型電子顕微鏡による観察を行った結果、板状の粒子が確認された（写真図版１）。また、分析の結果強い鉄（Fe）のピークが得られ、ベンガラであることがわかった。遺跡から出土するベンガラについては、レプトシリックス（Leptothrix）などの鉄細菌に由来するパイプ状の形状をもつ粉末と、天然の原石に由来する不定形の粉末の大きく２種類に分類されている。観察の結果、内外面ともにパイプ状の粒子は確認されなかったことから、天然の原石に由来するものであると考えられる。

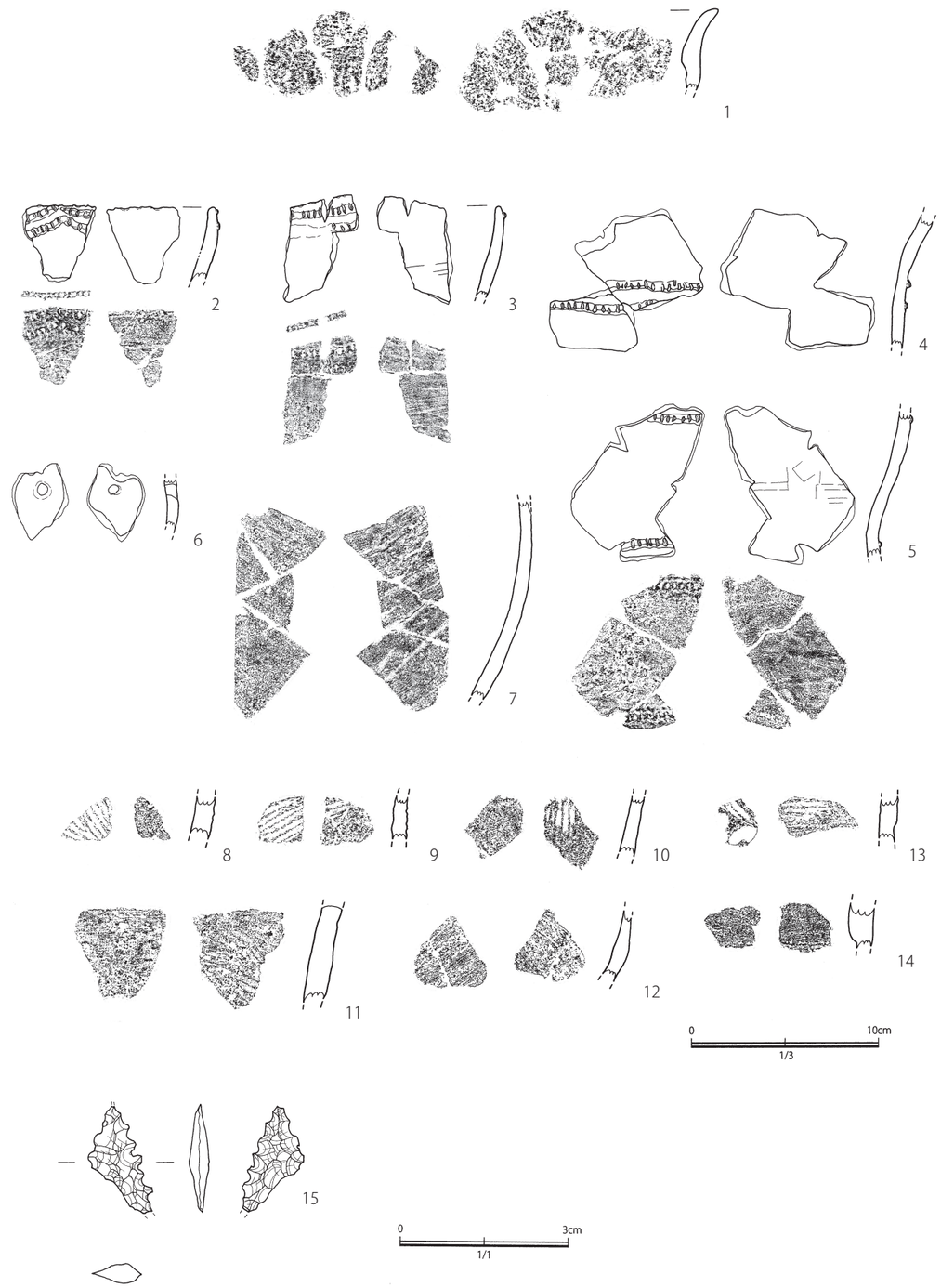


図版１　赤色顔料電子顕微鏡撮影画像

２～７は縄文時代中期に比定される土器で、口縁部及び胴部に刻目突帯文を巡らす土器である。口縁部がやや内湾し、口縁部下位で締まる器形を呈しており、口縁部形態は平口縁もしくは波状口縁である。文様は口縁部及び口縁部下位に細い刻目突帯文を巡らしている。胴部以下については出土点数が少ないため器形や文様は不明確である。また、土器片にはススが多く付着しており、胎土や焼成の状態・色調も類似していることから、掲載遺物の大半が同一個体の可能性がある。２・３は口縁部に刻目突帯文を２条巡らす土器で、共に口唇部にも刻目を施している。２・３については同一個体であり、波状口縁である。２は突帯を２条弧状に巡らし、器面調整は内外面ともに丁寧なナデ調整である。３は内外面ともに横方向の丁寧なナデ調整を行っており、外面下半にはススが付着している。４～６は口縁～胴部片で４は胴部に２条の刻目突帯文を巡らす土器である。器面調整は内外面ともにナデ調整であるが、内面はケズリ後丁寧なナデ調整を行っている。外面にはススの付着が認められ、特に破片上部には炭化物が付着している。５は口縁部と胴部ともに１条ずつ刻目突帯文を巡らした土器である。外面には全面的にススが付着しており、器面調整は内外面ともに工具によるナデ調整である。６・７は無文の胴部片で、６は直径４㎜程の穿孔が認められる。器面調整は内外面ともにナデ調整である。７は底部に近いと考えられ、内外面ともに横位の条痕を施した後ナデ調整を行っている。外面上部にはススの付着が認められる。

８～14はその他の土器で横転部分から出土した土器である。横転で各層の土が混ざった部分からの出土であり、時期や形式などは不明確であるが縄文時代早期の土器であると考えられる。８は外面に貝殻条痕を施した土器で、内面はナデ調整である。胎土にはわずかに金雲母が含まれている。９は内外面ともに貝殻条痕が施されている土器で内面は貝殻条痕後ナデ調整が行われている。10は内面の一部に貝殻条痕が認められる土器で、外面はナデ調整である。11は底部に近い胴部片と考えられ、内外面ともに荒いナデ調整であり、内面は貝殻条痕が残る。12は内外面ともにハケメ後荒いナデ調整が行われている土器で、胎土には赤粒が混在している。13・14については土器片の天地や傾きが不明で器形も判断し難い土器であり、上下が逆の可能性もある。13は外面に貝殻条痕と凹線文のような文様が認められる土器であるが、多くが剥落しているため詳細は不明である。内面は貝殻条痕が施されている。14は内面が急にすぼまった形状で、上部は他の土器に比べて器壁が厚い。器面調整は内外面ともにナデ調整であるが、すぼまった部分には貝殻条痕が施されている。

15は確認調査で出土した打製石鏃である。Ⅲ層から出土しており、一部欠損しているが形状は鍬形鏃で長さ1.9㎝、幅0.9㎝、厚さ0.3㎝、重さ0.4gである。基部には深い抉りが入り、不純物が多く見られる黒曜石製である。



第９図　出土遺物実測図　（土器 S=1/3　石器 S=1/1）

第２表　下尾平野第４遺跡出土土器観察表

図版№	遺物№	器種	部位	層	文様・調整		色調		胎土				備考
					外	内	外	内	石英	長石	角	その他	
第9図	1	深鉢	口縁部	Ⅶ	ナデ・貝殻条痕	ナデ	灰褐(7.5YR4/2)	灰褐(7.5YR4/2)	○	○		軽石・白粒	赤色顔料付着
〃	2	深鉢	口縁部	横転Ⅲ	丁寧なナデ	丁寧なナデ	灰黄褐(10Ｙ R6/2)	褐灰(10Ｙ R5/1)		○	○	白　粒	３と接合可能 スス付着(外面)
〃	3	深鉢	口縁部	横転Ⅲ	丁寧なナデ	丁寧なナデ	暗灰黄(2.5Ｙ5/2)	灰黄(2.5Ｙ6/2)	○	○	○	白　粒	２と接合可能 スス付着(外面)
〃	4	深鉢	口縁～胴部	Ⅲ	ナデ	ケズリ→ナデ	灰褐(7.5Ｙ R4/2)	にぶい黄橙(10Ｙ R6/3)	○	○	○	白粒・赤粒	スス付着(外面)
〃	5	深鉢	口縁～胴部	Ⅲ	ナデ	ナデ	褐灰(10YR5/1)	灰黄褐(10Ｙ R6/2)	○	○	○		スス付着(外面)
〃	6	深鉢	胴　部	Ⅲ	ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10Ｙ R7/3)	にぶい黄橙(10Ｙ R7/4)		○	○	白　粒	穿孔あり
〃	7	深鉢	胴　部	Ⅲ他	横条痕→ナデ	横条痕→ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	○	○	○	赤　粒	スス付着(外面)
〃	8	深鉢	胴　部	横転Ⅴ	貝殻条痕	ナデ	橙(5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	○		○	金雲母・白粒	
〃	9	深鉢	胴　部	横転	貝殻条痕	貝殻条痕→ナデ	にぶい褐(7.5YR5/3)	褐灰(7.5YR4/1)		○	○		内面粘土を貼付した痕跡あり
〃	10	深鉢	胴　部	横転	ナデ	貝殻条痕、ナデ	橙(5YR6/6)	にぶい黄橙(5YR6/3)	○	○		黒　粒	
〃	11	深鉢	胴　部	横転	荒いナデ	貝殻条痕→荒いナデ	橙(5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	○	○	○	黒色鉱物	
〃	12	深鉢	胴　部	横転	ハケメ→荒いナデ	ハケメ→荒いナデ	にぶい赤褐(5YR5/3)	褐灰(10YR4/1)	○	○	○	黒色鉱物 赤粒	
〃	13	深鉢	胴　部	横転	貝殻条痕・凹線文	貝殻条痕	褐灰(10YR4/1)	褐灰(10YR4/1)		○	○	砂　粒	
〃	14	深鉢	胴　部	横転	ナデ	ナデ(一部条痕)	にぶい褐(7.5YR5/3)	にぶい橙(7.5YR7/4)		○		黒色鉱物 砂粒	

第４章　調査のまとめ

下尾平野第４遺跡の発掘調査の結果、鬼界アカホヤ火山灰層（Ⅳ層）を挟んで下層から縄文時代早期、上層から縄文時代中期の遺構・遺物が検出された。調査区が狭小なため遺跡の全容は不明であるが、この地域に当該期の生活跡が存在することがわかった。以下、今回の調査結果について簡単にまとめておきたい。

まず、縄文時代早期について見てみると、少量ではあるが遺構・遺物ともに検出された。遺構について、ＳＣ１は床面近くにピットのような掘り込みがある土坑で、高鍋町に所在する牧内第１遺跡では類似する土坑が 26 基検出されており、「二段掘り土坑」という名称で報告されている。このような形状を持つ土坑は、その断面形から根茎類掘削痕の可能性が指摘されている。牧内第１遺跡ではそれぞれの土坑の規模の平均値が示されており、長軸平均 76.2㎝、短軸平均 41.7㎝、深さ平均 68.7㎝、１段目の掘り込みの深さが平均 30㎝である。ＳＣ１は全形が検出されていないので長軸と短軸については不明であるが、比較すると上記の平均値を若干上回る規模である。ＳＣ１からは遺物が出土していないため帰属時期については不明であるが、形状から牧内第１遺跡の土坑同様、根茎類掘削痕の可能性が考えられる。

出土遺物については、調査区南側からわずかではあるが縄文時代早期土器が出土した。また、横転部分から早期と考えられる土器が出土しているため、調査区南側以南には縄文時代早期の遺跡が残存している可能性がある。１は押型文土器の口縁部と考えられ、内外面ともに赤色顔料が付着していた。同時期の土器として、鹿児島県曽於市関山遺跡で変形撚糸文土器内入れ子に赤色顔料が貯蔵された状態での出土例がある。今回出土した土器は１点のみで小片のため詳細は不明であるが、縄文時代早期に都城でも赤色顔料が使用されていたことが窺える出土例である。

次に縄文時代中期について見ると、御池軽石層の下から縄文時代中期の深浦式土器（以下、深浦式）が出土した。本遺跡で出土している深浦式はすべて口縁部及び胴部に刻目突帯を巡らしたもので、胴部の文様などは不明であるが、器形及び文様形態から深浦式の中でも相美伊久雄氏の言われる深浦２式であると考えられる。市内で深浦式が出土しているのは、現在のところ南横市町星原遺跡のみで深浦２式を中心に出土している。石器について見ると、本発掘調査では調査区内でチップ以外に石器は出土していない。確認調査を行ったトレンチ周辺からは黒曜石を中心としたチップがやや集中する形で出土している。確認調査で黒曜石製の打製石鏃が１点出土し、その周辺からチップが出土していることから、調査区より北東側では石器製作が行われていた可能性が看取される。

今回発掘調査を行った下尾平野第４遺跡周辺は、山間部ということもあり、発掘調査がほとんど行われていない地域である。周辺の縄文時代の遺跡としては前述したとおり、本遺跡から南西に３㎞程のところに安久中原遺跡が所在し、早期の下剥峯式・前平式土器のほかに石鏃等が採集されているが、確認調査にとどまっている。また尾平野洞窟でも縄文時代後期の西平式や晩期の入佐式土器が出土しているが、正式な調査が行われていない。今回の調査でも遺構・遺物ともに数少ない出土となり遺跡の詳細は不明であるが、石鏃などの出土遺物や根茎類掘削痕と考えられる土坑の検出から、遺跡周辺では採集生活が営まれていた可能性が推察される。

【引用・参考文献】

相美伊久雄　2000「深浦式系土器の再検討」『人類史研究』№12　人類史研究会
高岡町教育委員会　2005『茶薗堀遺跡　吹上遺跡　瀬ノ上遺跡』高岡町埋蔵文化財調査報告書第 36 集
宮崎県埋蔵文化財センター　2005『牧内第１遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第 104 集
都城市教育委員会　2006『星原遺跡』都城市文化財調査報告書　第 72 集
山本直人　2008『縄文時代の植物採集活動―野生根茎類食料化の民俗考古学的研究―』増訂版　溪水社
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2008『関山遺跡・鳥居川遺跡・チシャノ木遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（125）
九州縄文研究会　2010『九州の縄文時代中期土器を考える』第 20 回九州縄文研究会佐賀大会要旨集
宮崎県埋蔵文化財センター　2011『俵石第１遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第 200 集

図版２

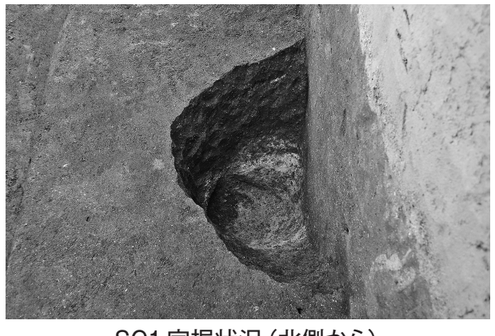
Ⅲ層遺物出土状況（西側から）

Ⅳ層上面掘り下げ状況（南西側から）

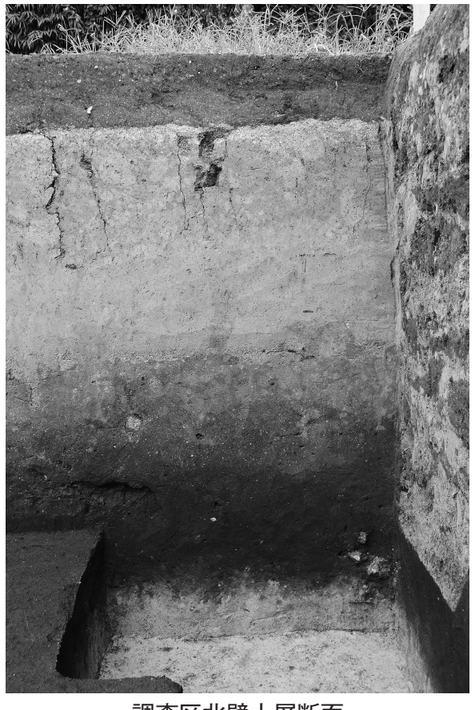
図版３

Ⅶ上面遺構検出状況（北側から）

SC1 完掘状況（東側から）

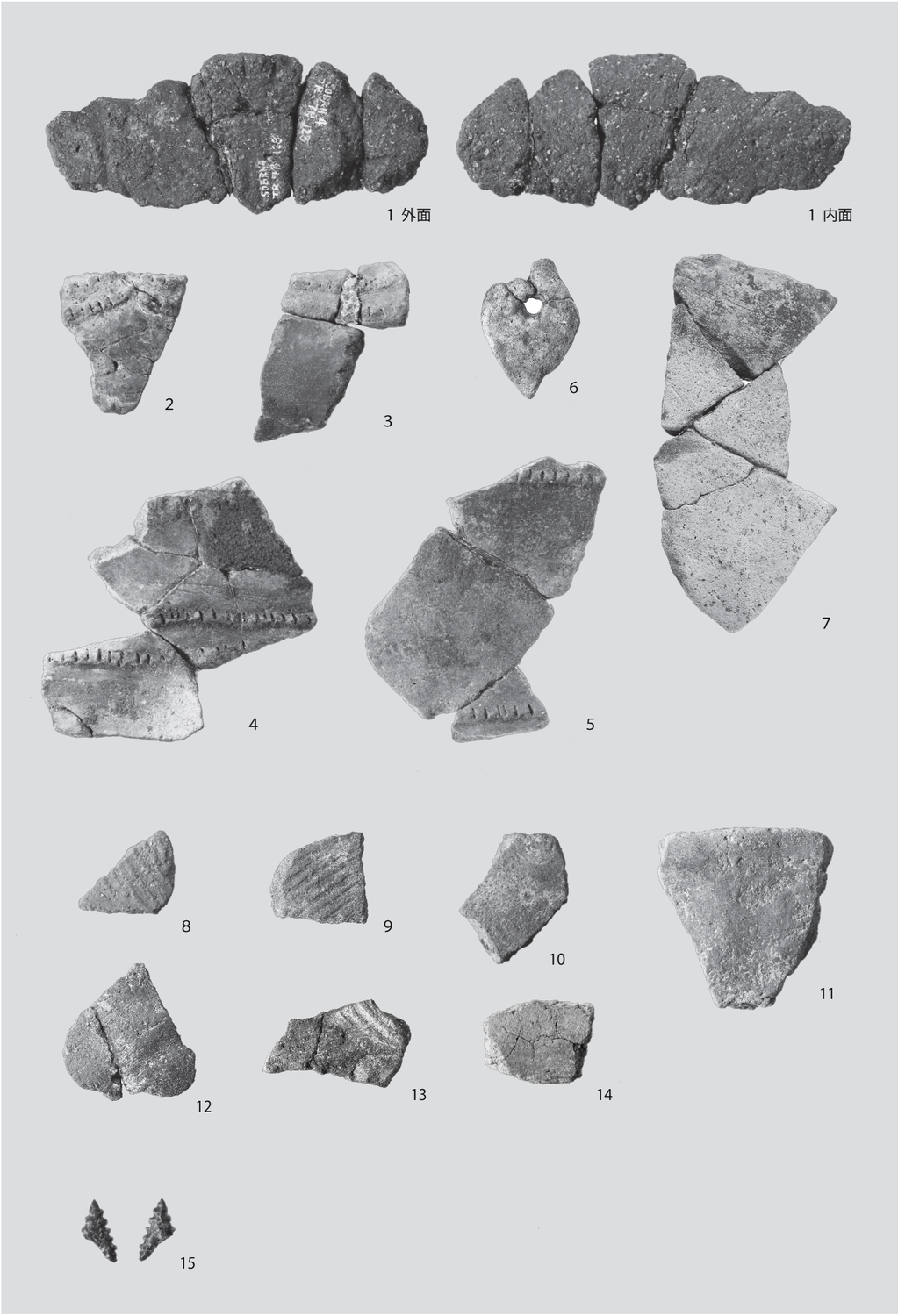


SC1 完掘状況（北側から）



調査区北壁土層断面

図版４



報告書抄録

ふりがな	しもおびらのだい４いせき
書名	下尾平野第４遺跡
副書名	携帯電話無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	都城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 115 集
編著者名	原　栄子
編集機関	都城市教育委員会
所在地	〒885-0034 宮崎県都城市菖蒲原町 19 － 1　TEL 0986-23-9547　FAX 0986-23-9549
発行年月日	2015 年３月 13 日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
下尾平野第４遺跡（しもおびらのだい）	宮崎県（みやざきけん）都城市（みやこのじょうし）安久町（やすひさちょう）	45202	M7085	31°38′39″付近	131°08′45″付近	2013.8.19～2013.9.13	36㎡	携帯電話無線基地局建設

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下尾平野第４遺跡（しもおびらのだい）	散布地	縄文時代	土坑	縄文土器 石器	

要　約

下尾平野第４遺跡は都城市安久町に所在する。携帯電話無線基地局建設に伴い、本発掘調査を実施した。

遺跡は安久町の中でも都城盆地南方の山間部で、安楽川右岸のシラス台地上位面に位置しており、標高は約 309m である。

今回の発掘調査は、アカホヤ火山灰層を挟んで上位と下位を対象として、サツマ火山灰層上面までの調査を実施した。

発掘調査の結果、調査区の半分程度は撹乱と横転の影響によって破壊されていたが、縄文時代早期と中期の遺構・遺物が検出された。縄文時代早期に該当するⅤ～Ⅶ層からわずかではあるが土器が出土した。遺構については土坑１基・ピット１基が検出された。縄文時代前期～中期に該当するⅢ層からは遺構は検出されなかったものの、中期の深浦式土器が出土し、石器は確認調査の際に石鏃が１点出土しており、確認トレンチ周辺からはチップが比較的まとまって出土した。

調査の結果、縄文時代早期から中期にかけての人々の生活の痕跡が窺えた。

都城市文化財調査報告書第 115 集

下尾平野第４遺跡

－携帯電話無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2015 年 3 月 13 日

編　集　　宮崎県都城市教育委員会

発　行　　〒 885-0034　宮崎県都城市菖蒲原町 19-1

都城市役所菖蒲原町別館

TEL（0986）23-9547　　FAX（0986）23-9549

印　刷　　有限会社　都城新生社印刷

〒 885-0004 宮崎県都城市都北町 7284-1

TEL（0986）38-3500　　FAX（0986）38-4187

都城市文化財調査報告書第１１５集

下尾平野第４遺跡

―携帯電話無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

宮崎県都城市教育委員会

２０１５